

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	わかば日記 : 文苑
Author(s)	肥の人
Citation	龍南會雜誌, 1 1 6 : 5 3 - 5 7
Issue date	1906
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5962">http://hdl.handle.net/2298/5962</a>
Right	

わかば日記

肥の人

若かへで

風しづかに花片落つることたそく、七日ばかりの月眉の如く、斜に花枝にかゝりて趣ある夕なりき、あこがれ心地の思にわたへず、そゞろあるきと庭に出でぬ。

わか楓、あけに匂うて、みぎりの松はくれゆく空にたぼろにかすめり、冠木門の形ゆがみてをかしげなるを潜りて行けば、道は麥圃の間を縫うて友がかりやの窓は、小緑の老梅の葉がくれにほのかに見ゆ、しんかんとして人のあるべき氣配だにせず、つとその前を通りて早くも我は緑の木がけにたゝへたる小沼の畔に立てるなりき、友の一人はこをしゝまの池と呼ぶなりとか、しじまとや、そはひろく藍をたゝへて底ひ知られず、深淵眠れる龍神を住ましむるの義か、はた萬古の愛情とはにかたく閉してもだしの水面夕べになしく人の死を誘うて暗の色ふかくたちこめたるをいふなるか、あらず、たゞ小さき沼なり、經は町にみたす深さ尋に及はず、濁れる水は濁れる想をもたらして趣なき沼なる哉、我はかく思ひつ、なほしばしそのほとりにたゞすみぬ。

沼のはとりに生れ、沼の畔に人となりたる我は沼てふ語にもなほ少なからざる歡興を有する者なるを、まして今緑の木の間かくれにもだしの沼の、色さへ憂にみちて我か前に控たるを見るにあたりて、我に或る趣ある悲しきむかしがたりの胸に浮び來りて、あこがれ心地の夢の境に我をみちびき

入るゝ事もたのづからなる事と云ふへきか、さらば少時我もここに休らひて汝ちと一夕の昔語りをたのしまむか。

古き思ひでの跡をたどり行けばげにそはすでに七とせあまりの昔語りとはなりたるなり、西の方ひる／＼と湛へたる、ぬなわの沼をうけて北には樹木鬱々たる小鷹の峰を負ひて、桃多き小村は長谷と呼ばれて、我か幼な思出のたどり行く所なり、人里とほくはなれてうら寂しく静けき此の村は美しき谷のはさまに巨勢の河べに沿ひて戸數は五十ばかりにもや、東には打開いたる牧場のいとひろきありて牛羊のあまた、のとがに遊べるあり、そは吉村とか云ける村の豪家のなかと稱せらる、此の家に何とか云ひけん名は忘れたれどうら若き一人子のさる高等の學校に學びつゝある由きゝたる事ありき。ぬなはの沼をめぐる長き堤は杉を植て所々松を交ゆ、年ふる事久しければ、年たけたる男の子の三人四人して抱くべき高さのさへありとか、縁もぞこく茂り合ひたる木の葉は露を宿して、夏は殊に曉色なんめでたかりける。行き／＼て、堤のつくる所には沼にあふるゝ水を落すとして作られたる石樋あり、樋番の翁は貞七とか呼はれて雪をはたゞく體も丈夫に情ある好翁にて孫女の何とか云けむ、さかしげなると二人住みぬ、家は樋のはとり小高きに位置を占めて眺ことうるはしかりき。

風なき夏の静なる夕ぐれ、夕陽華かに波を彩りて牧場にかへる群羊の鈴の音ゆるやかに、夕の空にひゞきわたる時、ぬなわの沼に浮ぶ白鳥の群をながめつゝ杉の堤をさまよいありし事はその頃の我がたのしみの一つなりき、野原かせぎの農夫の鋤を肩にしたるが一人／＼かげをかくしてわくれた

る。人が、牛を追ひつゝ去りしあとには鳥一羽とばずして夕の色はたゞ深くなりまざるのみ。はねつるべの音しづかに響きわたるに、やがて夕げ炊く烟の細くたちびきたる、白雲の除行するかともうたがはる、平和と満足とにみてる長谷の村には、神の愛も人のなさけも殊更に深きが如く思はるゝ哉、住む人ことごとく純朴質實なればにや、たへて争とそねみの聲とをきかず、かくて平和と愛樂との中にただやかに年を送り年をむかへて我が十四歳の春はめぐり來りぬ、その年のやよひ九日、夕ぐれなりき、夕陽なにとなき憂の色をもたらし、靜かに森のかなたに沈み行けば、ぬなわの沼は紫ことに深うしてけふは白鳥の群もあそはず、野になく牛のさけびも人の胸に沁み入るがとも思はるゝ、さまよひの中に十七夜の月はすでに靜けき光りを此の世になげて湖の面は深くさ霧にこめられて龍神のむせびきくやとも思へり、我が足はしらすゝ南の方へと降り行きぬ、江畔何人かはじめて月を見しと微かに詩など吟しつゝ行く、あゝさはれしめやかなる思ならずや、我は殆んどたへがたき心のくるしさを覺ぬ、月かげ又更にたほろにかすむとするに、たゞろかるゝ哉、この時人ありて堤の岸より沼の中へと跳り入れる者あらむとは、心も足も空になりて、走りつゝを救はむとしたれど誤りぬ、我は及ばざりき。聲——たかく人をよびぬ。

村人のたれかれ息せきして走り來りつ、それ舟よそれ棹よとあらゝかにのゝじりさわざつ。かくて程へて唇の色さへかはり果てたる若き女の體は上りぬ、そは樋番人の孫娘なりき、涙なからに孫娘の行方を尋ねて走り來りたる翁は此所にこの變れる孫の體を見付たるなりき。  
青白き顔色のこよひ殊に美はしかりし女を背にしてとぼくんと飯り行く翁の後姿を見たくりつゝ我

はたへがたきかなしさに涙ほろ／＼と落ちぬ、

あけの日、村人のうはさによりて娘の靈の遂にかへらずなりたる由き／＼ぬ、吉村にあてたる遺書ありたりとか。

人の近づけはいにふと我にかへれば、我はすでに沼のほとりを去りて茂姫様御墓地とかける石ぶみのあたりに苔むせる石の上に据ゑたり、人と見しはわか楓の靈のみだりなる想をさせと我に告ぐるなりき。

文

碑 文

あけの日、友の訪ふあり、二人して住吉の花をたづねむと汽車に乗りて行く、春の日今日ここに美はしく晴れ渡りて、目には新らしき春の色を觀、耳にはあたらしき春の聲をきく、心に新らしき春の思ひをわて、心地よき旅にもある哉。かくて四時すぎ漸うにして目的地につく、こゝは住吉の入江を前にうけて、金波銀波の寄する事たやかなれば入る船出船日に百を以て數ふべし。住吉神社に詣づ、住吉町の東端なる小丘の上にあり仁徳天皇を祀るなりとか、いたる時、花下すでに幾團の花見連あり、席を設け杯を舉げて相属し相酬し、醉眼はやく濛朧として卑俗の歌、心に任せて放吟高歌し喧々轟々たり、絃歌嘈々としていたる所、或は體を裸にして乱舞するあり或は相抱いて痴語喃喃するあり、靈場の穢辱、清城の攘滅、沒風流の骨頂、聞くにだへず見るにたへざるまゝつと足を裏門の方へうつす、こゝは前より更に一段の高地にして、櫻樹を滿栽す、段をふみてのはるに花片三四散り來りて、人の頬をかすめては去る、春日時に西になくめならむとして金竜波上を傳うて渡

苑

るもの四又五、對岸の江の津一眸の中にあつまりて快云ふべからず、思はずして俗惡の域を去りわたるをよるこぶ、上りつくして頂に近き所、碑あり題して水夫殉難の碑と云ふ、あはれ生きて生をねず死して瞑するををざる海人の靈を、なぐさめばやと碑前にすゝみ寄りて祀らるゝ石碑の主やたれと見るに祀らるゝ人の名はなくてたゞ祀りたる人の名のみいと明らかに／＼彫りつけあるを見出しぬ、この時ふと我は、我がうら覺ねの記憶をたとりて、友をかへり見つゝ、我は眺め入りたり、眺め入りつゝ運命のはげしきに涕きぬとさゝやきつげぬ、

I gared, and garing, weft the bitterness of fate.

それとこれとは人をことにし所をことにして、よし日を同うして論すべからずとするも、何れは同じ人のさだめと、そゝろに涙くまれぬ。

非

詩

# ○蛙なく夜

(一)

さめて寝る、病室<sup>へや</sup>これわが世。

榮落の野の風しらす、

天

山

いたつきのはやも六月を  
いぶかしや、何<sup>な</sup>のひどぎ、今。

きけ、あるは、しらべか、黄泉<sup>よみ</sup>の。  
かすけくも奈落の遠に。